

[A03] 災いのオーラル・ランドスケープ

○渡邊英徳¹⁾

首都大学東京¹⁾

〒191-0065 東京都日野市旭が丘 6-6

E-mail: hwtvn@tmu.ac.jp

Disaster Oral Landscape

WATANAVE Hidenori¹⁾

Tokyo Metropolitan University¹⁾

6-6 Asahigaoka, Hino-shi, Tokyo, 191-0065 Japan

【発表概要】

筆者らはこれまでに「ヒロシマ・アーカイブ」をはじめとする、戦災・災害のデジタルアーカイブを制作してきた。これらの事例では、多元的なデータが一元化され、VR/AR空間にマッシュアップされている。この表現手法によって、過去のできごとがランドスケープに重ねあわせられ、身の周りに着地するようになる。これを「多元的デジタルアーカイブズ」と呼ぶ。さらに広島においては、市民が参画するボトムアップの運動体が生まれ、資料を収集し、アーカイブを利活用する営みが進行している。これを「記憶のコミュニティ」と呼ぶ。これらが組み合わせることで、災いの記憶を未来につたえる「オーラル・ランドスケープ」が形成されている。本発表では、筆者らのコンテンツのデモンストレーションを通して、「オーラル・ランドスケープ」のありようについて述べる。

1. はじめに

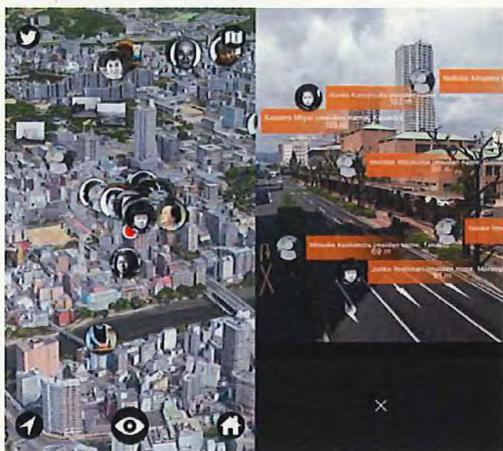


図1 ヒロシマ・アーカイブ

本稿では、人々のボトムアップな営みが収集するオーラル・ヒストリーと、デジタルアースがもたらすトップダウンの視野をつなぎ、記憶を未来につたえる「オーラル・ランドスケープ」について説明する。

筆者らはこれまでに「ヒロシマ・アーカイブ」(図1)をはじめとする、戦災・災害をテーマとしたデジタルアーカイブを制作してきた。これらのアーカイブでは、オーラル・ヒストリーをはじめとする、多元的なデータ

が一元化され、仮想現実(VR)・拡張現実(AR)空間にマッシュアップされている。この手法により、過去のできごとがランドスケープに重ねあわせられ、人々の身の周りに着地する。これを「多元的デジタルアーカイブズ」と呼ぶ。

加えて、アーカイブの対象地である広島においては、被爆者と地元の若者たちを中心としたボトムアップの運動体が形成され、アーカイブを育み、被爆の記憶をオーラル・ヒストリーとして継承する営みが進行している。これを「記憶のコミュニティ」と呼ぶ。

過去のできごとの実相を伝えるためには、できるかぎり多面的な資料を網羅する必要がある。後世に遺していくためには、資料が持つ価値をアピールし、社会の裡に、継承へのモチベーションを形成することが求められる。この要件を充たすコンセプトが「多元的デジタルアーカイブズ」と「記憶のコミュニティ」である。

これらが組み合わせることにより、ボトムアップな営みが収集するオーラル・ヒストリーと、デジタルアースがもたらすトップダウンの視野が接続され、災いの記憶を未来につたえる「オーラル・ランドスケープ」が形成されている。本稿ではそのありようについて説明する。

2.「多元的デジタルアーカイブズ」

散在する多元的な資料を一元化し、VR・AR空間にマッシュアップすることで、過去の災害にまつわる複雑な実相を、実感を持って伝えることができる。このコンセプトが「多元的デジタルアーカイブズ」であり、「オーラル・ランドスケープ」を構成する要素の一つである。

例えば、広島原爆に関する資料群はさまざまな場所に個別に保管されており、内部を横断的に閲覧・検索する手段はない。これはいわば、多数の「樹」がばらばらに生えているようなイメージであり、各々の樹や、茂る「葉」=資料どうしのつながりは把握しにくい状況にある。それに対して「ヒロシマ・アーカイブ」においては、すべての資料がデジタルアースのVR空間にまとめられている(図2)。このことによって、「全体の概要」と「個別の資料どうしの位置関係」をランドスケープに重ね、いちどきに把握することができる。

ユーザは、スクロールとズームイン・アウトを用いて「VR空間に再現されたヒロシマ」を探索しながら、個々の資料にアプローチしていく。こうした空間移動・場所移動をとともなうユーザ体験は、資料の「文脈」と「つながり」を顕在化する。加えて、異なる時代の資料を重ねあわせ、現代に生きる我々の位置づけを示すことで、できごとの「実感」が強められる。

例えば、1945年の広島市街地図に記された「Girls' High School」(現:広島女学院中学高等学校)の場所にズームインすると、多数の証言がひとところに集まっている(図3)。そして、そこに表示されているのは、すべて女性の顔写真である。これらのことから「女学校で女生徒たちがいちどきに被爆した」という文脈と、それぞれの資料のつながりが表現される。続いて、被爆直後の航空写真と現在の空中写真を切り替える(図4,5)と、焼け野原の「ヒロシマ」と復興を遂げた「広島」が、同じ視野のなかで重ね合わされる。

このデザインによって、遠い過去のできごとと、ユーザの身の周りのランドスケープとのつながりが表現され、実感が強まる。さらにこれらの資料が、スマートフォンのカメラを通したAR空間に表示されることによって、実感がさらに強められる。



図2 全資料が一括表示された状態

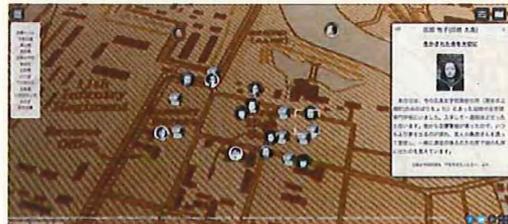


図3 多数の女性の証言



図4 被爆直後の空中写真との重層表示



図5 現在の空中写真との重層表示



図6 広島女学院周辺のARビュー

例えば、図 3~5 と同じ場所でアプリの AR ビューを起動すると、広島女学院周辺の風景に、被爆者の証言が重ね合わされて表示される（図 6）。現在の広島女学院は、幹線道路に面しており、背後に高層ビルが立ち並んでいる。この風景には、原爆投下直後のようすを偲ばせる要素は見当たらない。AR ビューに浮かぶ被爆者の顔写真と証言は、風景を補完し、かつてこの場所で起きたことをユーザに伝え、過去を辿るための糸口となる。

ここまで説明したように、「ヒロシマ・アーカイブ」では、多元的な資料の文脈とつながりが、デジタルアースのランドスケープに重なり合い、実感をもって表現されている。さらにそれらの資料は、AR 機能によって、実空間のランドスケープにふたたび着地し、身の周りに浮かぶ。こうしたインターフェイスは、過去につながる窓としての機能を果たしている。

この「多元的デジタルアーカイブズ」は、「オーラル・ランドスケープ」を構成するテクノロジー要素である。

3. 「記憶のコミュニティ」

前章では「多元的デジタルアーカイブズ」の技術的なメリットについて説明した。しかし、できごとの「実相」を後年に伝えていくためには、異なる方面からのアプローチも必要になる。

どの技術にも寿命がある。「ヒロシマ・アーカイブ」等に用いているデジタルアースの技術も、将来において使い続けられるという保証はない。技術の寿命を越えて記憶を遺していくためには、その記憶を「自らのことば」で語り継ぎ、ミッションを後世に伝える人々が必要となるだろう。そうした人々が存在していれば、時代とともに技術が移り変わったとしても、記憶は継承されていくはずである。

「ヒロシマ・アーカイブ」の制作において、筆者らは広島女学院高等学校の生徒たちと協力関係を築くことができた。彼女たちはこれまでに、被爆者の証言の収録活動を担当し、約 40 名にインタビューを行ってきた。若者たちのインタビューに応じて、これまで被爆を「他言したことがなかった」被爆者からも、次々と新たなオーラル・ヒストリーとしての

証言が得られた。こうした資料は、ヒロシマの「実相」をかたちづくる、貴重なパズルのピースである。

アーカイブの制作者として、主体的に被爆者の話を聞くことによって、証言についての記憶が、若者たちの中に、より強く刻まれる。若者たちは、自らがつくったアーカイブを使いこなしながら、ヒロシマの記憶を語るようになるだろう。こうして「作り手」は「語り部」となっていくはずである。

このように広島では、被爆者と地元の若者たちを中心とした運動体が形成され、オーラル・ヒストリーを収集し、戦災の記憶を継承する活動が進行している。筆者らはこれを「記憶のコミュニティ」と呼んでいる。

前章で説明した「多元的デジタルアーカイブズ」は、「記憶のコミュニティ」の営みに裏付けされている。そして「記憶のコミュニティ」は、「多元的デジタルアーカイブズ」を成長させようとする、人々の意思によって駆動されている。これらは補完的にはたらしながら、記憶を未来に継承している。

この「記憶のコミュニティ」は、「オーラル・ランドスケープ」を構成するコミュニティ要素である。ボトムアップの営みにより収集されるオーラル・ヒストリーが、「多元的デジタルアーカイブズ」によってトップダウンの視野とつながり、災いの記憶を未来につたえる「オーラル・ランドスケープ」が形成されている。

4. 「記憶のコミュニティ」の進化

2011 年の「ヒロシマ・アーカイブ」公開後、コンテンツ作成スキルを持たない広島の高校生たちは被爆者インタビューを担当し、それらをマッピングする工程は大学院生たちが担ってきた。最終成果物に直接コミットできないため、高校生たちの当事者意識が薄れるという懸念があった。

しかし「ヒロシマ・アーカイブ」は、HTML、JavaScript などのオープンな技術で構築されている。そしてこれらの技術は、高校生にも十分に習得可能なものである。技術を身に付けることができれば、高校生たちが直接、マッピング工程に携わることが可能になり、彼女たちの当事者意識と一体感を高めることができるだろう。



図7 被爆者と大学院生・高校生の共同作業



図8 高校生と大学生がデザインしたワークブック

そこで筆者らは、高校生たちが技術を学ぶワークショップを、2014年に実施した。会場において高校生たちは、大学院生の指導を受けつつ、被爆者とともに、被爆地点の推定とマッピング作業を行っていた(図7)。これは、当事者・記録者・技術者が一体となって活動する、進化した「記憶のコミュニティ」といえる。

さらに2016年からは、生徒・学生主体の「ヒロシマ・アーカイブ」利活用ワークショップもスタートした。このワークショップでは、アーカイブを平和学習の現場において活用する企画を高校生たちが発案し、メンター役の大学院生たちの指導のもと「ワークブック」(図8)としてまとめている。このワークブックは、「ヒロシマ・アーカイブ」を用いたフィールドワークを、事前学習から振り返りまでナビゲートするしおりであり、実際の修学旅行において利用されはじめている。

このように「記憶のコミュニティ」のネットワークは、時代にあわせて成長している。

さらに筆者らは、デジタルアースのプラットフォームを、企業プロダクトである「Google Earth」からオープンソース・ソフトウェア(OSS)の「Cesium」に移行した。「Cesium」の開発には、技術者たちが自由にコミットし、日々、機能向上が図られている。OSSに移行したことによって、独立性が高まるとともに、開発者コミュニティの恩恵を受けることができるようになった。

「オーラル・ランドスケープ」は、オープンソースのデジタルアース技術と、市民によるボトムアップの営みが絡み合うことによって、進化し続けているのだ。

5. おわりに

本稿では、「多元的デジタルアーカイブズ」と「記憶のコミュニティ」で構成される「オーラル・ランドスケープ」のあり方について述べた。これらの取り組みは、災いの記憶の価値を人々にアピールし、利活用と参画のモチベーションを社会の裡に生み出している。今後も、戦災・災害をはじめとするさまざまな題材に取り組みながら、手法の確度を高めていきたいと考えている。

参考文献

- [1] 湯崎稔：広島における被爆の実相(核兵器禁止と歴史学-国連軍縮特別総会にむけて<特集>)、歴史評論, Vol.336, pp.12-28 (1978).
- [2] 今村文彦, 柴山明寛, 佐藤翔輔：東日本大震災記録のアーカイブの現状と課題, 情報の科学と技術, Vol.64, No.9, pp. 338-342 (2014).
- [3] 放送大学情報化社会研究会震災報道検証プロジェクト：原発事故を米軍"準機関紙"はどう伝えたか：Stars and Stripes 紙の報道内容分析から, 情報の科学と技術, 情報化社会・メディア研究, Vol.9, pp.1-26 (2012).



この記事の著作権は著者に属します。この記事は Creative Commons 4.0 に基づきライセンスされます(<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>)。出典を表示することを主な条件とし、複製、改変はもちろん、営利目的での二次利用も許可されています。